自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

総合教育センター運営委員会 数理・データサイエンス・AI教育プログラム検討ワーキンググループ

(責任者名) 山本 高至

(役職名) ワーキンググループ長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和6年度入学の1年次生の履修率は92%となっており、令和5年度の94%、令和4年度の96%に引き続き高い値を示している。 一方で、令和6年度入学1年次の修了率は91%となり、令和5年度85%、令和4年度76%から年々向上している。これは、近年、数理・データサイエンス・AIに関する知識、技術の修得への関心がより高まっていること、プログラム認定されたことにより履修要項に明示し履修を促す取り組みを行ったこと、単位修得に当たってシラバスの評価基準を確認するよう促したことが大きいと考えられる。 引き続き、新入生オリエンテーション等を通じ、本プログラムを周知するとともに、プログラムを履修する意義について説明を行う。
学修成果	学生実験においてデータ解析が行われているが、特段、教員、TAから指示がなくとも、学生自らがノートPCを持ち込み、実験データの計算やカーブフィッティングを試みるケースが増えている。学生が自主的に情報技術を活用するようになった事例であり、本プログラムの学修成果の一つと考えられる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	受講生に対して実施している「授業評価アンケート」により、各授業に対する積極性、授業目標に対する達成度、及び、授業の内容や関連する分野への関心度の向上を確認している。いずれの項目も概ね評価が高い結果となっている。なお、一部科目においては、複数名から難易度が高いとコメントがあるため、科目のレベルは維持しつつも、丁寧な授業運営や質問対応が求められると考える。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和4年度以降の「授業評価アンケート」においては継続して、本プログラムが対象としている授業への積極性、内容や関連分野への関心の高まりを確認できていることから、今後とも履修率が高い状況が継続すると見込まれる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	全学の共通科目であり履修率の高い「工芸科学基礎」に数理・データサイエンス・AI関連の授業を組み込むことにより、全学的な履修、ならびに、高い履修率を計画した。令和6年度入学者の履修率は92%で、令和4年度から開始した本プログラムの通算履修率は74%となり、計画(令和6年度の履修率72%)を達成している。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムは令和4年度入学の1年次生から開始のプログラムであり、本プログラム修了者はまだ大学を卒業していないため、当該学生の卒業後に評価を行う予定である。将来的には、卒業生・修了生調査協力者会議等から情報収集を行うことを検討中である。</p> <p>本プログラムは令和4年度入学の1年次生から開始のプログラムであり、今後、本学も参画する、京都の大学と企業が互いの垣根を越えた交流を通して“「知」の共鳴場”を実現し、そこから新たなイノベーションを創出し、日本の科学技術、産業界に貢献するとともに、世界をリードする人材を輩出することを目的として設立された京都クオリアフォーラムにおいて、本教育プログラム内容・手法等への意見を求めていくことを検討している。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学べ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>各課程での「データを読む、説明する、扱う」という数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関する授業において、各課程の専門分野で取り扱うデータを使用して授業を行うことで、数理・データサイエンス・AIを学べ楽しさや学ぶことの意義を理解させている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>受講生に対して実施している「授業評価アンケート」で得られた意見を参考に、学生の「分かりやすさ」の観点から講義の内容・実施方法の見直しを検討している。</p> <p>また、社会の変化等に対応するため、数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアムが提供する教材も活用したうえで、実験データを用いた実践的な解析演習を通じて、「何ができるのか」を具体的に理解させるように務めている。</p>